

① 霧ヶ峰(2016年7月24日 霧ヶ峰)



7月下旬。夏休みが始まる頃だ。夏休みが欲しい。学生の頃はザックを背負って色んなところへ出かけた。お金がないから青春18切符や格安チケットで何とかする。お金はないけれど時間はあった。今は時間がなくてお金はある。それで、たぶん60歳ぐらいになったら、時間もお金もあるけれど体力がなくなるのだろう。

さて、こちらの霧ヶ峰は体力がなくなってもお金と暇があれば訪れることのできる百名山である。ロープウェーもあるし林道も通っている高原だ。森林限界以下であるが、ここは古くからカヤを刈ってきた為に草原となっている。つまり人の手の入った景色だ。山頂部はなだらかな平原で、誰でもゆっくりと散策を楽しむことができる。青空と白い雲と平原がそろえばいつでも20歳の頃の気持ちに帰ることができるだろう。

② 八島ヶ原湿原(2016年7月24日 霧ヶ峰)



日本最南端の高層湿原こと八島ヶ原湿原である。高層湿原は、一言で言うと、説明が面倒な湿原、だ。

よく言われるのは、低温の為に植物などの枯死体が分解されにくく、高く層状に積みあがってコンタクトレンズ型になったもの、というものだろう。写真をよく見てほしい。草原の真ん中あたりが盛り上がりが見えないだろうか。見えないかもしれない。しかし盛り上がっているのだ。

鎌倉彫のお盆を想像してほしい。鎌倉彫の背景は丸刃の彫刻刀でウロコ状に彫られている。そこに雨水が溜まったとする。水溜まりにはミズゴケが生える。水が溜まらないところは生えない。そうすると水たまりで生育したミズゴケが泥炭となってどんどん堆積して行って、凹部が盛り上がり凸部がへこむ。すると、新たに凹部になったところでミズゴケが生育するようになる。湿原の端のところは水が流れ出てしまって、もうミズゴケは生えない。ここが重要なポイントである。さて、凸凹が何度も何度も逆転を繰り返していくと、端の方は必ず水が流れ出て、ミズゴケが生育しなくなっていくので、中心部がどんどん盛り上がりしていく。それで全体としてはレンズのような凸型地形になる。

という説明が面倒くさいので、泥炭が高く積もった湿原のことだよ、という説明で済ませよう。何千年もの自然の遷移を頭で想像するのは難しいことだ。

③ たぶんオオカサモチ(2016年7月24日 霧ヶ峰)



セリ科の同定は難しい。が、オオカサモチという札があったのでたぶんオオカサモチである。下の方の丸い球がつぼみである。これが割れると、このような花火のような花になる。

夏場の沢筋、湿原の至る所でいろんなセリ科の花がパツパと開いている。余りにもありふれていて、そしてたくさん種類があって、色合いも地味といえば地味なのであまり顧みられることはないが、山の植物の造形としてはユニークだと思う。

見かけたら、夏を感じてほしい。

④ ヘビ (2016年7月24日 霧ヶ峰)



湿原に突き出た岩の上、ヘビが日向ぼっこをしていた。大きさや模様からしてアオダイショウではなかろうか。

最初に、霧ヶ峰は体力のない人でも歩けるといように書いたが、この日は学校の遠足だろうか、たくさんの児童がいた。その賑やかなこと。それで、近くに居た児童に「ほら、あそこ見てごらん」と、このおじさんが要らんことを言うと。

大騒ぎ。当然ヘビも退散していく。

山で出会う危険生物の中で、最も怖いのはハチである。スズメバチやアシナガバチがホバリングしていたら私はすぐに引き返す。次がヘビではないか。これらの有毒生物の厄介なところは、治療が受けられるところに行きつく前に毒が回る、ということである。むやみに藪をつついてはいけない。彼らだってヒトとは距離を取りたいのだ。私たちが距離を取らなければならない。